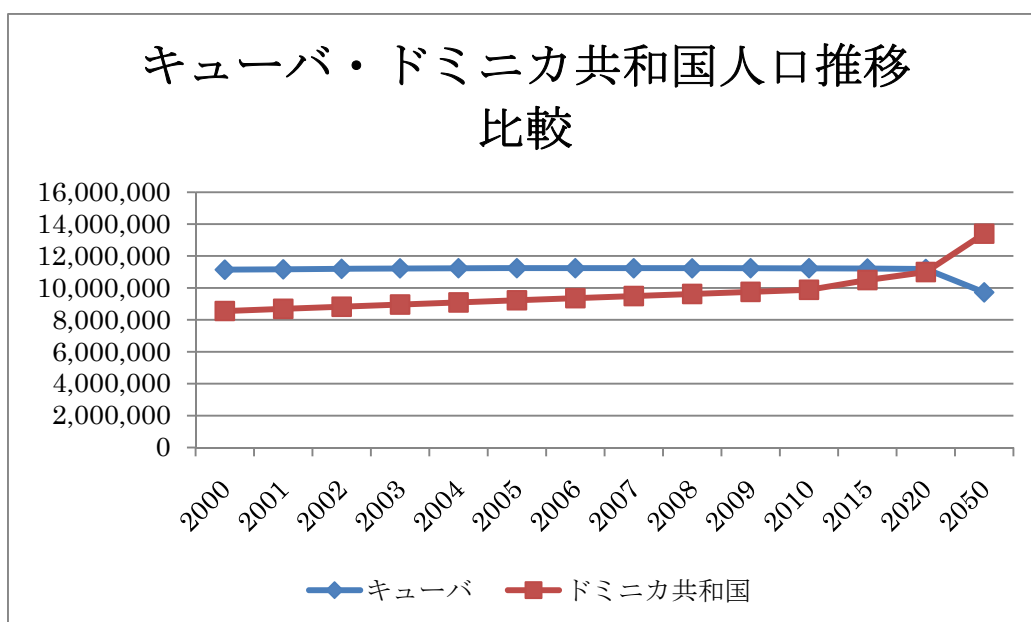


キューバが、カリブ海最大の島でなくなる？

—深刻なキューバの少子化、高齢化問題—

キューバは、2010年現在、人口11,241,161人であり、人口においても、面積においても(11万1千平方km)、「カリブ海最大の島」といわれている。これまで「カリブ海最大の島」といえば、キューバを指し、キューバの代名詞だったのである。

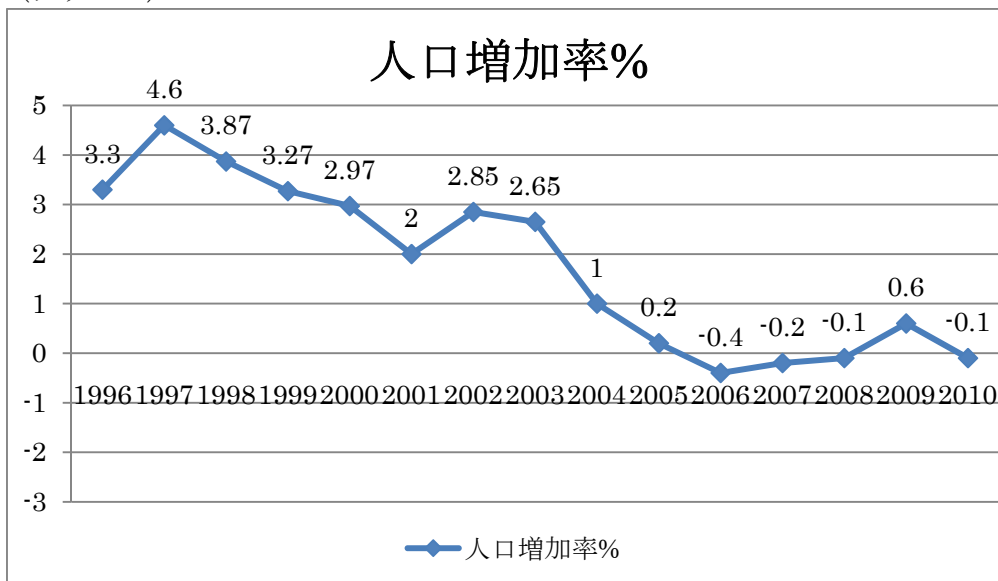
しかし、最近の人口推移が続けば、2019年には、隣の島のドミニカ共和国（面積4万8千平方km）に、2022年にはハイチ（面積2万8千平方km）にも人口が抜かれ、人口においては、「カリブ海最大の島」ではなくなる。少子化、高齢化問題は、キューバ社会の深刻な問題となっている。



それは、キューバの人口が、近年減少傾向にあるからである（グラフ1参照）。その理由としては、次のことがあげられる。

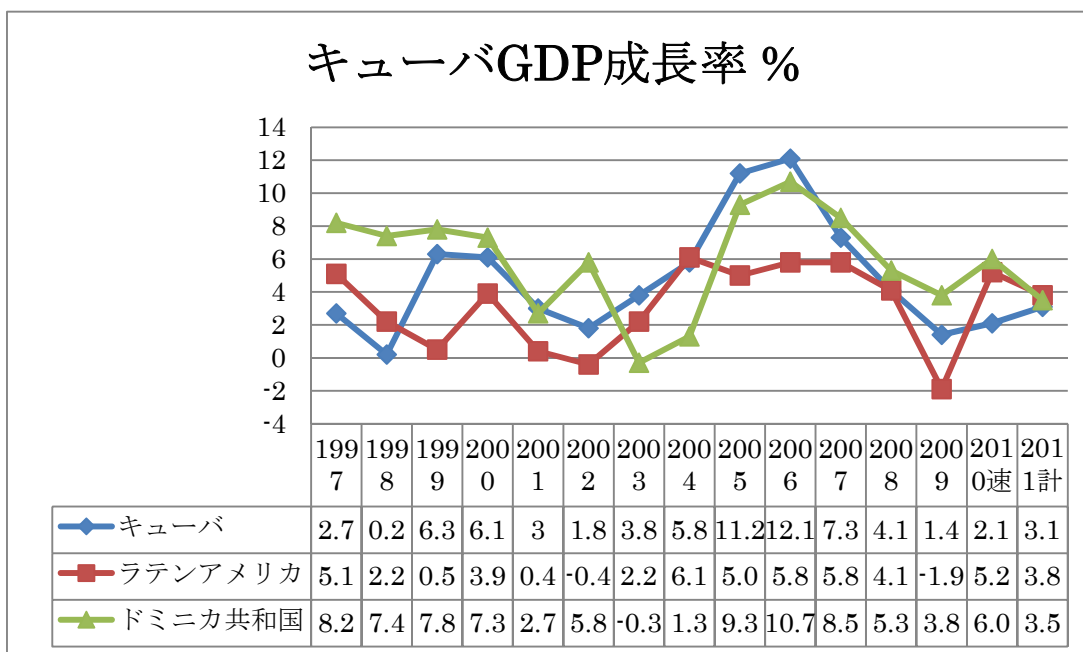
- ① 労働者の80%を占める国家公務員の賃金が、生活の4分の1程度しかカバーできず、なんらかの他の収入源を探さなければならず、生活の見通しが立てにくいこと。
- ② 住宅が困窮しており、結婚生活に適した条件がなかなかなく、結婚率、出産率が低いこと。
- ③ 出生者数から死亡者数を引いた自然増はプラスであるが、経済困難から（グラフ2参照）、海外、主に米国に移住するものが、年間3-5万人おり、その結果絶対数では人口がマイナスとなっていること。
- ④ しかも、海外移住者には、青年層、高学歴層、白人層が多く、一層の高年齢化など、様々な問題を社会に投げかけている。

(グラフ 1)



また、人口構造をみれば、若年層よりも高年齢層が多いという、いわゆるギャクピラミッド型となっている。たとえば60歳以上の高齢者が、17.9%に達し、0-14歳までの若年層よりも多くなっている。ドミニカ共和国では、この若年層は36%に達している。

(グラフ 2)



現在、キューバは、根本的な経済改革に取り組みつつあり、そこでは、これまでの全般的な全国民一律の補助金の支給(配給手帳、教育・医療の無料制度、文化・スポーツの低料金入場料、その他社会サービスの低料金など)を廃止して、真に社会的扶助が必要な弱者

層、低所得層を支援する社会福祉制度に変えようとしている。そうした中で、今後、人口では少数の若年層が、多数の高齢者層をどう支えるか、難しい問題となっている。

ちなみに、キューバの平均寿命は、2005-2007年度、男性76.00歳、女性80.82歳であり、10年間で5年程度延びる傾向にある。また、定年は、2008年に男性、女性とも5年延長され、男性65歳、女性60歳となっている。

(2011年7月31日 新藤通弘)